

——人の誇りが風景の中に見える。大森町のどこにそれを感じますか？

大森町は歴史ある古民家が並ぶ美しい街並みで知られています。外から見れば古民家でも、中に入れば心地よく暮らせる工夫がされている。博物館のように保存するだけではなく、人の暮らしの中で風景が受け継がれています。それは、群言堂（※2）の松場大吉さん、登美さん夫妻（※3）や、この地の人が作ってきた風景です。それから、この町の人たちはよく通りに花を飾ります。ささやかだけれど、訪れた人を楽しんでほしいという気持ちが見えますよね。僕も最近、門に小さな版画を飾りはじめました。

## 人の少ない場所だからこそ日本や社会の課題がよく見える。

——大森町での暮らしを始めて、約3ヶ月が経ちました。

この町にいと、日本や社会のことがよく見えますよ。僕は、大森町の話をするとき「人口6000人の銀山の町」と言っていたんだけど、今は約400人なんです。減っているんです。でも、この小さなコミュニティの中に、環境や経済、医療や教育、全ての課題がある。都市では社会の問題は隠蔽されて、直接的に関わずに生きることもできます。でも、4000人の規模では生活と社会の問題を切り分けることはできないです。

——人の少ない場所こそ、縮図として社会が見えやすいって。

「ミ捨て場も見えるし、水がどこからどう来ているのとも見えますから。僕は、『ニライカナイ』という写真集で、日本の離島を巡り取材をしました。島という物理的に限られた世界の風景の中に、日本の問題を浮き彫りにしたんです。つまり、僕のこれまでやってきた仕事というのは、自然の原風景と人が作ったものの関わりを批評することなんです。

——大森町で暮らしながら日本の課題を見ることは、写真家としての仕事と繋がっているんですね。

そうですね。ただ、その一方で、これまでは「写真家としての自分は傍観者でしかないのでは」という気持ちもありました。コロナや時代の変化の中で、「次は生活者として風景を作る側になりたい」という思いが強くなってきたんですね。それも、大森町に移った理由のひとつです。

——風景を批評する立場から、風景を作る立場になる。それは具体的にどんなことでしょうか？

例えば、田舎の人って本当に歩かないですよ。僕は心身のメンテナンスのため毎日近所を歩きますが、今は新緑の季節でとても気持ちがいい。みんな車で通り過ぎる道を僕が歩いているだけで、ちょっとした表現になるかもしれないと思います。ほんとうに小さなことですけどね。

——藤井さん自身、これから大森町でどんなことをやりたいと考えていますか？

この家は古い武家屋敷を改装したもので、自宅兼事務所として「加藤家SUDO」と表札を出しています。東京では「藤井保写真事務所」の名前でスタジオを構えていたけれど、もう、藤井保はいいかな（笑）。それよりも、地域の人が大切にしてきた「加藤家」という名前を残したいと。ゆくゆくは、写真家やデザイナー、いろいろなクリエイターが集う場所にしたいと考えています。僕は50年ぶりに島根に戻った人間で、ある意味では外の人です。い意味の違和感をもちながらここで生活することで、この町に少し違う風が吹けば、僕のいる意味もあるのかなと思います。

## 地元の中高生をモデルにした2枚の写真作品。

——今回、山陰を舞台に表紙と裏表紙、2枚の写真作品を寄稿していただきます。これから撮影ですが、どんなイメージを考えていますか？

どちらも大田市の海をバックに撮影しようと考えています。1枚は弓道部の高校生二人。日本の武道は所作がきれいで、静かな中に美しさがあります。もう1枚は吹奏楽部の中学生のマーチングで、音が聴こえてくるような童話的楽しさをイメージしています。写真作品に込めるメッセージはありますが僕はいつもあえて多くを語らないようにしています。それは見た人が想像力を働かせるところで、見せすぎないことや説明しないことって、とても大事です。

——地元の高校の写真部の生徒たちも見学に来ると聞きました。

以前から写真部とは付き合いがあって、生徒の写真を僕が批評するようなこともやっています。みんなうまいですよ。みんながプロを目指す必要はないけれど、写真が好きな人になってくれたらいいと思います。写真を通して世の中が見えるということもありますから。

——出演するモデルも地域の中高生です。若い世代へ伝えたいメッセージはありますか？

今は絶望と希望が同居する混沌とした時代で、これから世に出る人は大変なことも多いと思います。でも、どんな時代でも希望や美しいものに目を向けることはできます。暗い中でも、どこかに光がある。それは僕の写真表現で常に意識していることでもあります。僕も含めて完璧な人はいないです。でも、全く無能で才能のない人っていうのも、またいない。才能と無能は紙一重です。若い人たちは、自分が楽しみたいことを思い切りやってほしいですね。

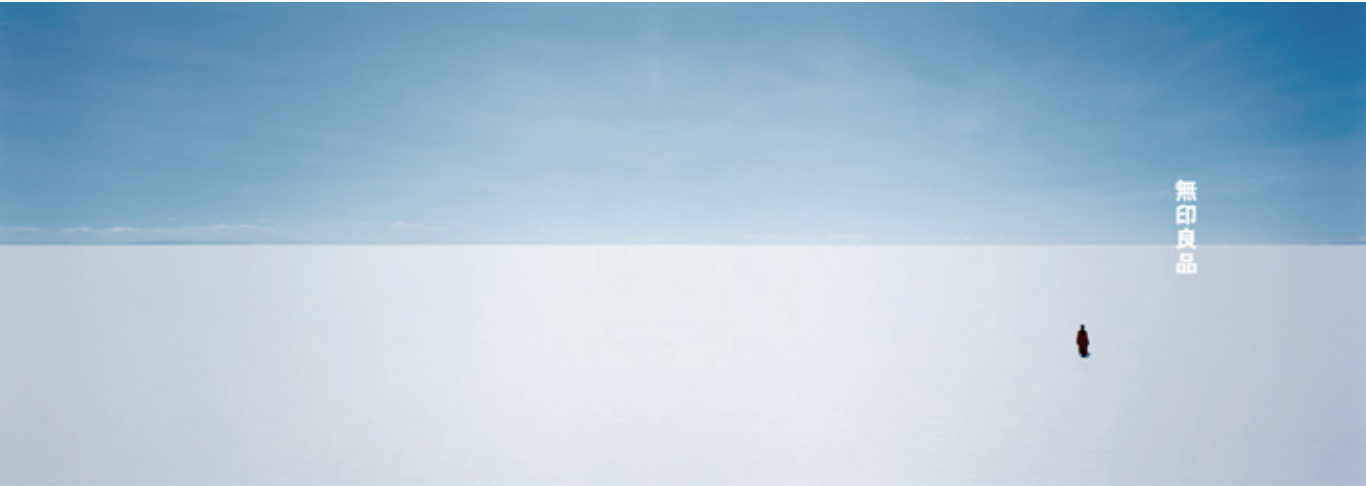
——改めて、藤井さんが思う山陰の暮らしの魅力や可能性について教えてください。

僕は、これからは東京やニューヨークといった都会に何かの先端がある時代ではないと思います。コロナの問題もあるし、世界中をグローバルに行き来する時代にはそうそう戻らない。僕が今暮らしている大森町は小さな町ですが、群言堂や、中村ブレイス（※4）という素晴らしい企業があり、各地から若い人たちが集まって来ている。山陰に限らず、小さな町で大きな哲学を持って生きる人っているんです。これからは、自分の暮らす足もとを掘り起こすことでしょうか。地域に根差しながら、東京もニューヨークも飛び越えて、日本や世界のこと、地球や宇宙まで見る、そうしたことが大切だと思います。

### Profile

藤井 保（ふじい たもつ）

1949年島根県大田市生まれ。大田高校卒。広告制作会社の写真部で勤務後、独立。JR東日本、日清カップヌードル、マグライト、無印良品などの広告写真で知られる。ADC最優秀賞、朝日広告賞、カンヌ国際広告祭フィルム部門銀賞ほか受賞多数。主な写真集に『ぐんげんどう』（平凡社）、『ニライカナイ』『カムイミントラ』『A KA RI』（すべりトルモア）、『藤井保の仕事と周辺』（六耀社）など。2021年に東京から、石見銀山のある大森町へ拠点を移す。



①



②



③



④

① CL：株式会社良品計画、AD：原研哉

② CL：株式会社エイアンドエフ、CA：TUGBOAT、AD：TUGBOAT、CW：秋山晶、D：BRIDGE、Crd：TAKE2

③ CL：旭化成株式会社、AD：中嶋貴久

④ CL：石見銀山 群言堂、CD：佐藤 卓、AD：林 里佳子